



難聴と認知症

— 難聴は認知症の危険因子、補聴器で認知症予防 —

耳鼻咽喉科頭頸部外科 小川 恭生

難聴と認知症

高齢化社会を迎え、認知症高齢者の増加により、様々なことがらが社会問題となっていますが、最近、難聴と認知症の関係が注目されています。難聴は認知症の発症リスクを約 2-3 倍上昇させ、認知症の約 9% は難聴が原因で発症したと推測されています。

加齢による「聞こえ」の老化は個人差が大きいのですが、40 歳を過ぎると聴力は徐々に低下し、一般的には、50 代になると小さい音や高い音が聞こえにくくなり、60 代後半では、男女とも半数近くが加齢性難聴であるとされています。難聴になると、周囲からの情報量が絶対的に減少していきます。他人の言っていることがよく聞きとれない、会話がうまく成立しない、という経験を繰り返すことにより、周囲との関わりを避けるようになります。その結果、だんだん社会との交流が減少し、精神的健康にも影響を与え、認知機能の低下をもたらすこととなります。これは逆に、難聴にキチンと対処し、良好な「聞こえ」を維持することが、認知症を予防できることを意味しています。

補聴器について

難聴を放置することにより認知症を発症するおそれが高まるにもかかわらず、日本の補聴器普及率は、欧米に比べはるかに低い水準にとどまっています。「補聴器をつけることはカッコ悪い」などのネガティブなイメージが強く、難聴を放置する結果と思われます。今日では、さまざまなタイプの補聴器が製品化されており、性能は日々、進化しています。補聴器の購入の際は、まず耳鼻咽喉科を受診し、そのうえで紹介された店舗で購入してください。補聴器はメガネとは違います。メガネはすぐに見えるようになりますが、補聴器は 2、3 カ月の時間をかけて「体になじむよう音量を調整していく」必要があります。利用者の状態を観察する医師の指導のもと、補聴器技能者によるきめ細かな調整を経て、その人にフィットする補聴器が完成します。耳鼻咽喉科の医師の中には、補聴器の専門家である「補聴器相談医」がいますので、病院を選ぶ際の参考になさってください。

知らないうちに、拡めちゃうから。



手指の消毒・マスク着用

にご協力お願いします

